

# 見えなくなった身近な水環境を見えるようにする社会的仕組みの試み

—「遠い水」を「近い水」に—

水と文化研究会 代表 嘉田由紀子

## 1980年代、なぜ水と文化研究会か？

日本の他の多くの地域と同様、琵琶湖周辺の水をめぐる環境は、高度経済成長の間に急速に変化した。

急ぎすぎる発展が環境汚染をどんどん加速させていることに気づきはじめてのが1970年代末だった。琵琶湖総合開発の影響で水の合理的な利用を進めるがあまり、水は人びとの暮らしの意識からますます「遠い」また「見えにくい」存在になっていた。しかし当時、社会的に最大の関心が向けられていたのが物質に主眼をおく「水質汚染」で、水や湖と人びととの「かかわりそのもの」に目が向けられることはなかった。水政策も物質としての汚濁物の流出を「制御する」という方法が主で、水とかかわる生活意識の「内面を豊かにする」という発想は見えなかった。

琵琶湖の水質という一点に集約するのではなく、私たちに身近な日常の暮らしの中の水環境を住民生活の足元から考え、水を「近い」存在、「見えるもの」にし、暮らしの「内面を豊かにしたい」という思いから発足させたのが水と文化研究会だった。平成元年、1989年のことである。

それ以来、水と文化研究会では、地域の人びとと研究者（生態学、環境社会学等）が協力するなかで、生活現場から見えなくなってしまった「遠い水」が身近な「近い水」として蘇えり、水とかかわる内面生活を豊かにするには？という視点から、住民主体の水環境調査を企画し、さまざまな実践を行ってきた。

## 10年以上続く「ホタルダス」調査

1980年代、琵琶湖周辺で暮らしてきた多くの人が「昔は水はきれいだった。ホタルも顔にあたるくらいいたくさんいた」と言っていた。「水がきれい」で「近い水」が生きていた時代を象徴する生き物が「ホタル」だった。そこで身近な水環境調査のテー

マとしてまず幅広く人びとが関心をもつホタルを選んだ。河川や水路に生息する生き物の生態や分布、人びととホタルのかかわりの変容を追跡した「ホタルダス」は1989年から10年以上の継続調査となった。10年間に累計約3400人以上が調査に参加し、総調査人日は44,804人日に達した（表1）。一人分になおすと、実に120年分以上の年数に相当する。調査の流れは図1に示す通りである。

「ホタルダス」を10年続けて残ったモノは二つあった。一つは、毎年調査結果を冊子にまとめ出版した『私たちのホタル』という冊子（写真1）である。もうひとつは、水辺を見つめる意識をもった人が増え、世代を超えた人のつながりが醸成されたことである。

表1 ホタルダスの参加者

ホタルダス 年度 平成(西暦)	累計 参加 者数	参加 市町 村数	調査 地点 数	総調査 人日	備考
1年目 元(1989)	567	37	519	4,622	「住民参加による身近な水環境調査」
2年目 2(1990)	1,298	47	1,265	21,610	〔琵琶湖研究所；II元-3〕
3年目 3(1991)	700	46	667	8,626	
4年目 4(1992)	124	25	101	1,495	東京がエイタシ大賞・環境賞
5年目 5(1993)	85	28	76	1,079	「ホタルダス80人の声」取材(15-6) 日本自然保護協会「エコ・リポート」
6年目 6(1994)	146	29	83	1,504	道庁編追加
7年目 7(1995)	128	34	118	1,628	
8年目 8(1996)	75	28	66	974	ハンパ文化振興財団・地域振興課 琵琶湖博物館開館「特別展示コーナー」
9年目 9(1997)	75	27	77	1,091	
10年目 10(1998)	258	40	224	2,754	上総幼虫調査追加
	3,456	-	3,196	45,283	

参考：滋賀県50市町村



写真1 各年の観察記録をまとめた冊子

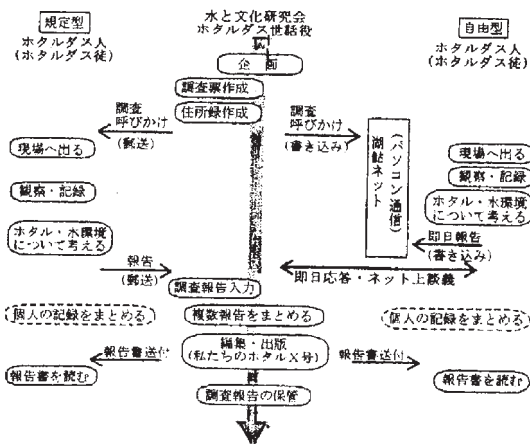


図1 「ホテルダス」調査の流れ

世代を超える身近な水環境の変化への認識は、水利用と排水の今昔を比較するという「水環境カルテ」調査へと展開した。

### 「水環境カルテ」調査

昭和30年代、琵琶湖の水も川の水も直接に飲める地域が少なくなかった。人の健康にカルテがあるように、地域の水環境にもそれぞれの「カルテ」が必要ではないか、という思いから、水利用と排水の仕組み、水の自主管理組織としての地域自治組織の役割などを綿密に追跡調査したのが「水環境カルテ」調査である。地域の住民50人が滋賀県下600集落を1000人の古老に聞き取りをし、水道導入前後の用水や排水の仕方を、実際に生活現場に出かけ、見て、聞いた結果を10000ページに及ぶ報告書として作成した。そのファイルは琵琶湖博物館に展示されている。また、12000枚の地図付き写真をデータベースにしてHPでも公開した。

水カルテ調査からわかったのは、昭和30年代の農村の暮らしの中には、水や栄養分を有効に、そして無駄なく使う「使いまわし文化」が生きていたということだった。「始末して」、「ていねいに」「もったいない」と思う、そのようなモノへの配慮が、同じ土地に暮らす人たちの共同の暮らしを支

える「わかまえ」として、ごく当たり前に認識され、実践されていた。

図2.3は、飲み水の水源と風呂水の水源を昭和30年代と現代とを比較したものである。かつての飲み水の水源は、滋賀県全域で井戸水が多いが、山間部や湖西、湖北では川水や湧き水利用の集落が多いことがわかる。

20世紀は、日常生活のなかに機械エネルギーが導入された世紀だった。重い桶を担って水汲みをし、ウンコ、オシッコを、「コエモチ」として田畑に施した人のエネルギーにかかわって機械のエネルギーが水利用においても主流となった。近代式水道という革命的な生活技術が持ち込まれたのである。車が導入されたのもこの時期だった。このような生活革命は、水と人とのかわりにどのような社会的、文化的な意味の変容をもたらしたのか。

川沿いの道は車が主役になって水ぎわがなくなり、自然のことにあつた暮らしの水利用には水道が導入され、個人利用管理になって、人と川の関わりが遠くなってしまった。近代技術が入り込んだ昭和30年代後半から、目先の豊かさと経済的利益の拡大は、同時に水と人との「距離の拡大」

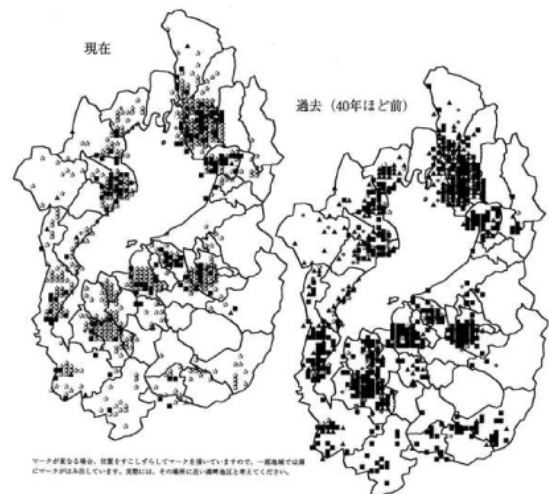


図2 飲み水の水源の変化

見えなくなった身近な水環境を見えるようにする社会的仕組みの試み  
 —「遠い水」を「近い水」に—

水と文化研究会 代表 嘉田由紀子

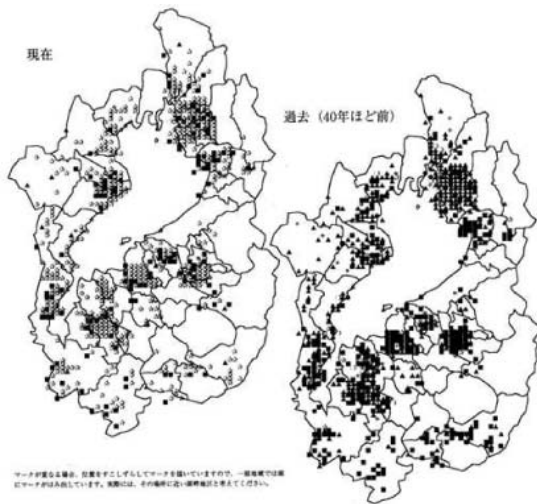


図3 風呂水の水源の変化



写真2 かつての水利用の場であるカワト

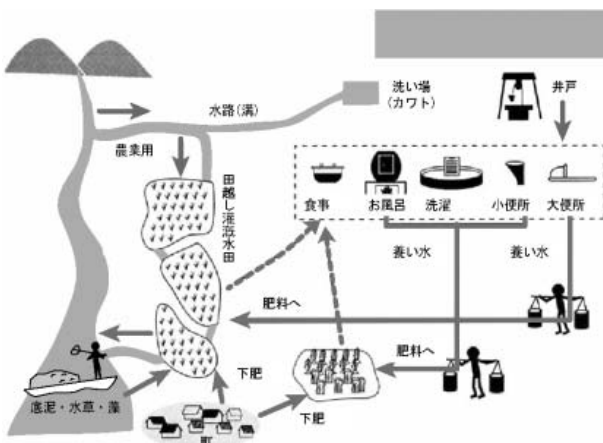


図4 水道導入前の水利用のながれ

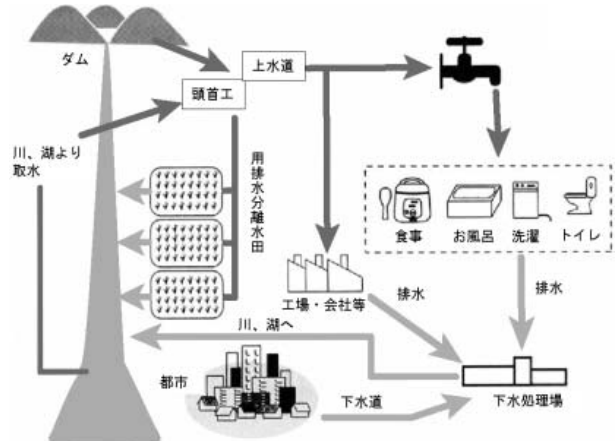


図5 水道導入後の水利用のながれ

を加速させる結果となった。

もちろん水道導入により、女性や子どもは水汲みの労働から解放され、生活の場での衛生条件も改善された。多くの女性は、水道がはいた時「天国にきたみたい」と喜んだ。

しかし、琵琶湖には大量の汚水が流れ込み、河川流域と琵琶湖との総体としての水循環システムは分断され、水の維持管理のしつこみが地域から離れ、県や国などのより大きな行政組織の管理へとむかう結果となった。そして人びとは、水環境の保全に対して、次第に無力感を深め、行政や専門家への依頼心が強くなっていった。

「水辺あそび」は内面的豊かさの象徴

水とのかかわりの内面的豊かさを強く表現していたのは、子ども時代の水辺の遊びだった。高齢になっても、人びとは自身の子ども時代の水辺遊びを鮮やかに記憶し、語ってくれた。特に魚つかみなど、生き物とのかかわりが深く記憶にしみこんでいることもわかった。水や川から遠くなったのは大人ばかりではない。子どもたち自身も水から遠くなっていた。

しかし、子どもの遊びはほとんど記録に残っていない。子どもの遊び調査から、かつての豊かな

生態系の復元も可能ではないか、という方向が見えてきた。そこで始めたのが水辺遊びの調査だった。

この調査では、今の子どもたちがまず自分の水辺遊びを記録し、そのあとで子どもたち自身が自分の父母、祖父母に聞き取りを行うという「三世代交流型の遊び調査」を方法化した。琵琶湖周辺の子ども2000人、父母世代2000人、祖父母世代2000人、合計6000人が参加する大がかりな調査となった。

仲間と議論しながら、主体としての人、対象としての生き物、場としての環境という3つの領域を構成要素としてそれぞれのつながり方をしらべることにした(図6)。この調査でわかったことは、3点あった。ひとつは、かつての水辺には大きな魚がたくさんいて、その多様な生態系が子どもの水辺遊びのおもしろさの原点であった、という生態的豊かさの重要性である(図7)。2点目は、遊びでつかんだ魚も日々のおかずとなり、生活の中で生かされていた、ということである(図8)。そして3点目は、今の子どもも環境条件や社会条件が整えば本物の生き物とのかかわりを求めている、ということであった。

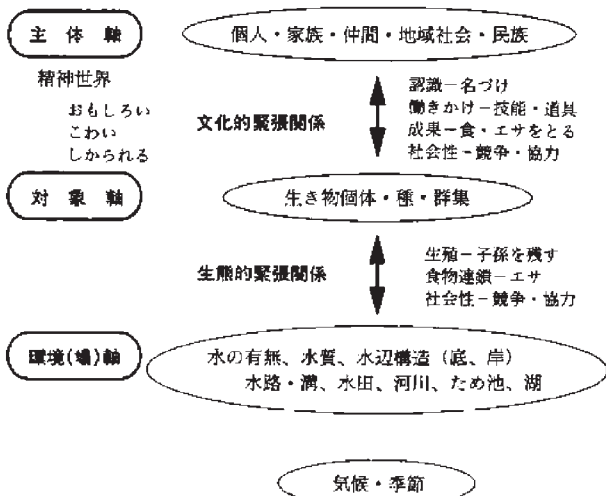
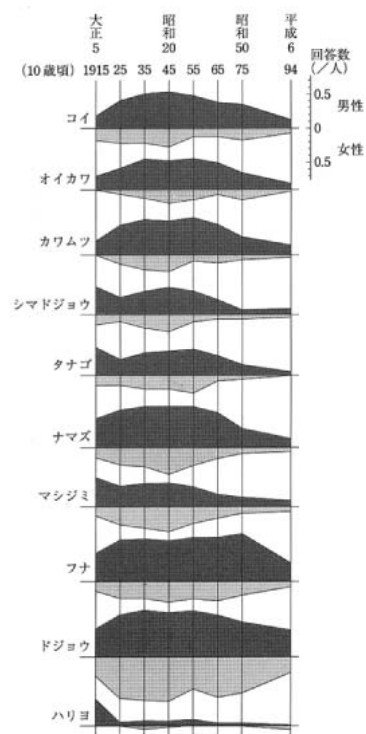


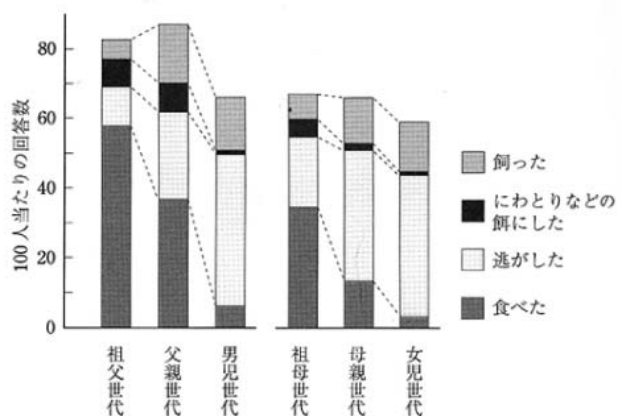
図6 「水辺の生き物つかみ」構成要素関係図

水や川と人とのかかわりの「近さ」を取り戻すには、まず、水辺で遊ぶ子どもたちの姿を取り戻すことが重要ではないか、という発見となった。



つかんだ魚の種類、調査した20種類のうち減少が認められた種類(嘉田・遊磨, 2000)。

図7 水辺の生き物の3世代にわたる変化



つかんだ生き物の利用法(嘉田・遊磨, 2000)。

図8 つかんだ魚の利用法法の3世代にわたる変化

## 見えなくなった身近な水環境を見えるようにする社会的仕組みの試み —「遠い水」を「近い水」に—

水と文化研究会 代表 嘉田由紀子

そこで、地域の子どもたちと一緒に人と水のかかわり文化を探し、昔あそびを体験しながらたくさんの方の面白さを発見してみようということから、次に展開したのが「世代をつなぐ水の学校」という、2001年からはじめた実践活動だった。

### 世代をつなぐ水の学校

滋賀県琵琶湖の西部、高島市新旭町には今も豊かな湧き水とカバタ（洗い場）文化が生きている。まず、地域の高齢者と子どもたちと一緒にいくつかの小さな集落内水路や洗い場を探求し、近い水の象徴でもある自然の水探しをした（写真3）。さらに水田にはかつて魚たくさんいたことを知り、魚を田んぼに呼び戻そうとみんなで魚道づくりをし（写真4）、湖辺に自生するヨシの刈取りからヨシを使った家づくりをしたり、懐かしい漁法の「ハチづけ」で魚つかみをするなど、地域の生活文化を自分たちの目で見て、耳で聞いて、体で感じるという体験活動を行った。

活動結果は大型ポスターにして公民館などで展示したが、それだけでは暮らしの中で「見える」ものにならない。子どもたちとともに撮影してきたたくさんの水辺写真を暮らしの中で「毎日見る」ことが大切ではないか、ということで、水のカレンダーをつくろうという発想が生まれた。ここから学校行事やゴミ収集日などの地域情報をいれた自分たちのコミュニティだけの生活カレンダー「針江水ごよみ」が生まれた（写真6）。このカレンダーづくりには、子どもたちの活動に触発された自治会の人たちの積極的なかかわりがあり、当たり前前の暮らしぶりに改めて向き合った地域の人たちの結束を高めることにも役立った。

ちょうど、この地域では、生活文化に根ざした地域まるごとエコミュージアムづくりや、「ないものねだりではなく、あるもの探しから地域の活力を生

み出そう」という、いわゆる内発的発展をめざす「地元学調査」が行われはじめており、これからの活動とも呼応する形での動きが展開してきた。



写真3 子供たちも洗い場（カバタ）の水を飲んでみる



写真4 魚道づくりをする子どもたち



写真5 「針江水ごよみ」カレンダー

## ローカルとグローバルをつなぐ

琵琶湖の足もとを見つめる調査研究活動は、世界各地の水と人とのかかわりを見つめることでよりいっそうその特色がみえることになる。ローカルとグローバルとつなぐ、という思いから、1990年代後半以降、水と文化研究会のメンバーは、中国、アメリカ、アフリカなどの水辺を訪問し、そこの水利用調査などを行った。そのような国際比較から、日本人の水文化はホタルや水辺遊びに固有の意味と価値をおいていることもわかった。

また逆に、世界各地から琵琶湖周辺の地域社会



写真6 世界子どもフォーラムで高島市を訪問した世界の子どもたち



写真7 高島市の農家を訪問し、し尿の農地還元について学ぶアフリカの青年

に人びとを招待し、相互の交流を図った。2003年の世界子ども水フォーラムでは、アジア／アフリカの子どもたちを、湖西の高島市の村に泊まり込みで招待をした。水不足や水汚染に悩む途上国の子どもたちにとっては、集落の中で自然にわく水の豊かさは驚きだったようで、そこに驚く子どもをみて、高島市の子どもたちも改めて自分たちの水の豊かさを自覚することになった。

また2004年には、伝統的に便所をつくる文化をもたないアフリカの青年を湖西の農村にまねき、日本伝来のし尿の肥料利用について学んでもらった。この活動は、1990年代の水環境カルテの国際版でもある。

## こわい川との「近さ」も知る－水害体験を次世代に伝える

ホタルも水環境カルテも水辺遊びも、いわば「やさしい川」「めぐみの川」とのかかわりである。しかし、水は時として牙をむき、私たちの脅威となる。こわい水の成り立ちを知りながら、その付き合い方を知ることこそ、水の本質を「見える」ものにし、「近い水」を生かしつづける原動力になる。

琵琶湖周辺では、幸い近年には大きな水害は起きていないが、昭和20?30年代にはたびたび水害に見舞われた地域も多い。そこで、過去の水害体験を掘り起こし、その記憶を次世代に伝える活動を2003年以降、開始した。ここではワークショップ方式を採用し、子どもたち自身が、過去の経験



写真9 水害体験を子どもたちに伝えるワークショップ場面

見えなくなった身近な水環境を見えるようにする社会的仕組みの試み  
 —「遠い水」を「近い水」に—

水と文化研究会 代表 嘉田由紀子

を学びながら、「もしも大雨がふったらどうしたらよいのか」という実践的な水害への対応力を高められるような方法を模索しつつある。

15年の活動を振り返って

発足から15年、水と文化研究会では通奏低音としての「ホタルダス」や「水環境カルテ」調査を母体にして、国内外に向けていろいろな活動をしてきた(表2)。私たちの調査研究・実践活動は、文字に残されにくい日常の暮らしの経験と記憶を記録化するとともに、地域住民ひとりひとりの自己判断力と「住民力」を増すことにある。明治20年代、昭和30年代に次いで、今日本全国で平成の大合併が進む。そのような中で、小さなコミュニティを主体とした水や土地の利用、環境保全、防災の仕組みが改めて見直されている。私たちは、このような小さなコミュニティの潜在的な力を掘り起こし、次世代につなぐための支援役割を果たすものであり続けたい。

表2 水と文化研究会の活動のあゆみとながれ

年代	調査研究・実践活動	交流メディア	発表メディア
1989年	生息観察 思い出調査	パソコン通信 (湖帖ネット)	DTPとしての 「私たちのホタル」 (第1号~10号)
1990年代	ドーター湖調査(アメリカ) 臨時水かさ比べ (アフリカ水カルテ調査)	WWW開設	東京クリエーション大賞 ハン六文化財団地域復興賞 世界湖沼会議での発表
2000年	水かさ比べ本格調査開始 冬編 データ入力・整理作業 の共有化(WWWの活用) マラウィ湖水利共同調査(アフリカ) ホタルダス寺子屋活動		環境庁水環境賞 「みんなでホタルダス」新曜社刊 環境自治体会議発表(水俣)
2001年	水かさ比べ本格調査開始 夏編 湖南省水利利用調査(中国) アフリカ水カルテ調査 マラウィ湖辺調査	世界湖沼会議での発表 寺子屋ホタルコンサート	全国ホタル研究会発表(山形)
2002年	「水の学校」開校 「もしも蛇口の水が止まったら」調査 アメリカ五大湖調査		環境水俣賞受賞 「私たちの水」第1号出版
2003年	「地元学」 湖西地域 世界子ども水フォーラムに協力 「もしも大雨が降ったら」 災害と聞き取り調査開始 水と文化研究会事務所開設 メコン川流域洪水調査 (カンボジア・トンレサップ湖)		「私たちの水」第2号出版
2004年	「地元学」 湖西地域 アフリカの若者を招待 エコトイレワークショップ		「針江 水ごよみ」カレンダー発行 「菜の花と里山の水辺」開館 「私たちの水」第3号出版
2005年	江南地方水辺景観調査(中国)		子ども向け水啓蒙作成 日本水大賞「大賞受賞」